

企業は人なり

セントラルファイナンス(現セディナ)の出身で、愛知県安城市の中央人事総研代表の著者が「中小企業で人が育ちにくい理由」の法則を見つけ、確実に社員が育つ方法を伝授する。「顧客の課題を解決する」をモットーにする金融機関が、取引先に中央人事総研を紹介するこ



とも、あるそつだ。「鉛筆なめなめ、舌先三寸」で人を評価するのではなく、社員が前向きに働くことで業績の向上につなげる制度の構築方法を解説。具体的な導入事例と成果を紹介する。本腰を入れた実践に向けて、図表も数多く取り入れている。

中小企業の社員成長支援制度

大竹英紀著 合同フォレスト(1728円)

「人事制度導入だけでは8割方が失敗する。制度の運用で社員一人ひとりを巻き込みながら、成果を出せる仕組みが必要」と強調する。

労働人口の縮小で、これから働き手の確保がますます難しくなる中、サブタイトルの「今いる社員で成果をあげる」というのも意図。人事制度は社会経済情勢や労使双方の考え方もともに変化してきた。足元では仕事に対する価値観の多様化、多岐にわたる雇用形態への対応、団塊世代の大量退職などヒトに関わる課題は尽きない。ただ、どんなにAIが発達しても「企業は人なり」はこれまでもこれからも変わらない。

「人と過去は変えられないが、自分と未来は変えられる」と言ったのはカナダの精神科医エリック・バーン氏。最近、身につまされる事も多々あるが、自らが変わること組織全体の未来でも描こうか。(月)

書籍

生まれ変わる鉄のまち

「地域活性化」を耳にする機会が増え、地方自治体や金融機関の取り組みが紹介されている本があればと思いい書店を巡って出会ったのが本書。北九州の逆襲というタイトルに惹かれた。

1983年に5市合併で誕生した北九州市の人口は当時102万人。鉄のまち、ものづくり



のまちとして発展を遂げ、日本の四大工業地帯の一角を占めたが、公害問題や八幡製鉄の合併などで70年代から人口減少に苦しみ、05年に100万を割り、18年4月時点で95万人となった。政令指定都市のなかでは高齢化が最も進んでいる。人口の30%が65歳以上だ。

北九州の逆襲

葉月けめこ著 言視社(1620円)

かつての北九州市に対するイメージは「公害」「鉄冷え」「文化がない」ということは、著者も認めるところだが、そんなイメージを脱そうと「環境」「観光」「映画」をキーワードに地域活性化に力を入れている。

70年代に産官民一体で取り組んだ公害問題は改善され、87年には環境庁から「星空の街」に選定されるほどに、人気テレビドラマ「相棒」の映画化の際には、北九州フィルムコミッションが協力し、小倉駅周辺にある6車線道路300メートルを12時間封鎖。市民エキストラも約3000人が参加した。

門司港駅などを整備しレトロ地区がつくられたのは95年。いまでは年間200万人が訪れている。九州を離れ東京在住となっていた評者は活気ある門司港を知らなかった。ぜひ一度は訪ねてみたい。(敬)